

手沢

上二

一九八一年七月二日

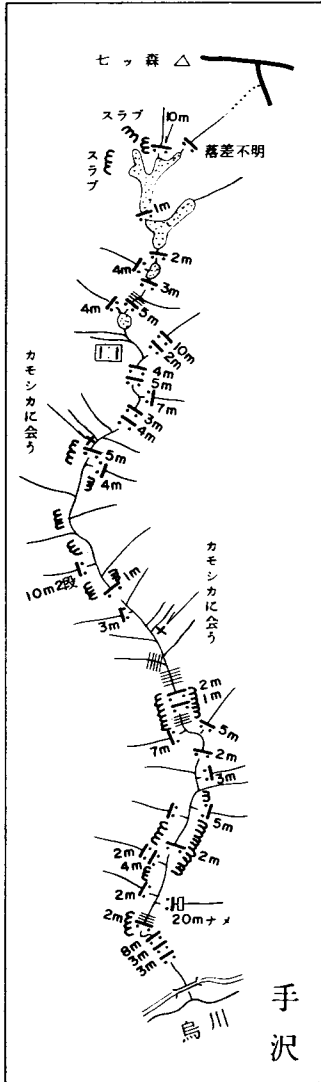
烏川林道起点から徒歩約一時間で手沢出合に着く。身仕度をして出発。

出合から暗い廊下が続く。滝はたいたものはかかっていないが、ちよつとした難所である。へつりで通過する。岩は花崗岩質で、ホールド豊富。フリクシヨ

ンも良く効く。

続いて第二の廊下。小滝が二つかかるが、へつりで通過。この先は平凡な河原歩きとなる。

イワナの姿を見



る。なかなかの大口がいる。数も多そうだ。普通の釣人は、下流の二つの廊下辺りで引き返して行くせいだろう。ちよつとした深みにいくつもの姿を見る。

前方から犬のようなものがかけて

きた。カモシカだ。しかもまだ子供のカモシカである。我々の目の前でUターンして、右手の支流に入り込んでいった。

平凡な河原歩きにいいかげんあきてきた頃、滝が出てきた。落差五メートル。本流にかかるはじめての本格的な滝である。右岸を登って上に出る。仲間二人が上がってくるの待っていたら、またカモシカが出た。この沢には、出合から源頭まで、随所に足跡

がついていた。通り道として、頻繁に利用されているようだ。

四ノ五の滝が続く。通過にあまり困難はない。そして二俣。左俣の方が本流だが、右俣には一〇の滝があつて、こつちの方に入つてみた誘惑にかられる。

奥から涼しい風が吹いてきた。どうも雪渓がありそうだ。今年は、冬の豪雪を反映してか、いくら沢筋と



手沢の廻行

はいえ、茂庭のような標高の低い所で、七月というのに雪渓があちこちで見られる。

最初は、今にも崩れ落ちそうなスノーブリッジ。一人一人離れて慎重に通過。五の滝を直登した先にもまたスノーブリッジ。そしてその先は二〇の滝ほどの二俣になった雪渓である。そしてその先に更に一キロ程の雪渓。見上げる前方には、スラ

ブをつけた七ツ森急傾斜で、どんな高度を稼ぐ。この傾斜と周囲の岩質からして、雪が消えたらどんな滝が姿を見せるだろうか。

雪渓の最上部で一休み。すでに雪

温帯の代表的な樹木③

カシワ(ナ科)

樹皮が黒褐色で、硬く裂目ができており、高さは一〇〜一五メートルになる。▼カシワの最大の特徴は、その葉にある。五月のころ、カシワ餅を包むのに使われている葉である。塩ゆでにして使っているが、大きなものでは三〇センチくらいにもなる。▼カシワの実は、一・五〜二センチの球形をした、通称ドングリと呼ばれるものの一種。ヒゲみたいな多数の鱗片が生えて、実をおおっている。地方によっては、実を粉に挽き、団子として食するという。私はまだ食べたことはない。(大西)

が消えて草々の茂ったなかに、黄色の花が咲き乱れている。ニッコウキスゲなんて聞いたことがないが、どうもそうみたいだ。

最後のツメは、浮石と雪崩で根こ

上赤倉沢(仮称)

一九八四年七月二二日

九時五〇分、下降開始。すぐに上赤倉沢(仮称)源頭部に出る。

上赤倉沢については事前は何の情報もなく、どんな沢だろうかという期待半分、どうせたいしたことはないまいという気持が半分といったところだったのだが、実際には期待以上の楽しい下降となった。

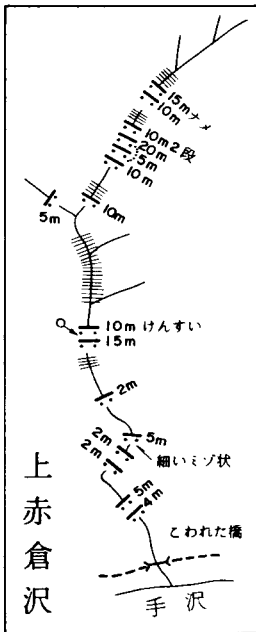
一〇分程は平凡な細い流れであっ

そぎにされた樹木の手まったルンゼを登る。一五時〇五分、セツ森北方の尾根上へ。(記)

「タイム」 手沢出合(九:〇〇)↓二俣(二:二〇)↓セツ森北方尾根(一五:〇五)

たが、その先からは滝の連続。一〇分クラスのが次々にかかる。いずれもやや傾斜があり、細かいホールドがあるのだが、下るとなると不安が大き、ブッシュを利用しながらのク

ライミングダウン



をくり返す。七個の滝をそうして下り、右岸から小沢が合流する地点に出てひと休み。

滝の連続が一段落した感じとなったので、これでほぼ核心部はおしまいかと思うと、その先にまた大きな滝。これはホールドがなく、懸垂下降となる。その下の一五分滝はクライミングダウンできた。

あとは小滝が適当に出てきて、手沢との合流点に一一時四〇分到着。

「タイム」 九一〇・八は三角点峰(九:〇〇)